

## 眠い時は寝ちゃうけど

仙台宮城野教会牧師 齋藤 朗子

マタイによる福音書25章1～13節

1「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。<sup>2</sup> 愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。<sup>3</sup> 愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。<sup>4</sup> 賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。<sup>5</sup> ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。<sup>6</sup> 真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。<sup>7</sup> そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。<sup>8</sup> 愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』<sup>9</sup> 賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』<sup>10</sup> 愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。<sup>11</sup> その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。<sup>12</sup> しかし主人は、『はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。<sup>13</sup> だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」

---

本日より教会の新しい1年が始まりました。キリストの誕生および再臨を「待つ」第一アドベント(待降節)の今日は、「キリストを待つわたしたち」をテーマにマタイ福音書からメッセージをききたいと思います。

先日、説教の準備をしている時にふと思い出したことがありました。それは、「屋根の上のバイオリン弾き」というミュージカル作品の、結婚式のシーンです。有名なミュージカル作品なので、ご覧になった方もいらっしゃると思います。私は舞台ではなく映画になったものを観たのですが、結婚式のシーンは夜でした。空は暗くなっていて、参列者は手にろうそくを持っていました。このことからわかるように、ユダヤ人の習わしでは、結婚式は夜に行われるもので、イエス様の時代もそうでした。仕事を終えた村人がみな参列できるようにという配慮でしょう。

まず、花婿が花嫁の家に向かいます。そして、花婿は花嫁を連れて家に戻り、結婚式が始まります。花婿と花嫁にはそれぞれ、友人たちが介添え人として一緒についていきます。たとえに出てくる十人のおとめは、花嫁の介添え人として、花嫁と一緒に花婿の家まで行く役目を持っています。

さて、イエス様はマタイ福音書 24 章から 25 章にかけて、いわゆる「この世の終わりに関すること」を集中的にお話になりました。そして、このたとえ話では、イエス様の「再臨」について、そしてイエス様が宣べ伝えられてこられた「天の国」、つまり神のご支配による幸いな世界がいつ訪れるのかについて言及しておられます。つまり、今日のたとえ話はイエス様が語られた「終末に関する教え」の一つです。

「平和で公正な天の国は、いつ到来するのか」。これは、重荷を負ってあえぐ私たちの誰もが抱く疑問かもしれません。この疑問を胸に秘めたまま、天の国の到来に先立つキリスト・イエスの再臨を信じてひたすら待ち続けているのが、私たち教会です。「それはいつですか」と、イエス様のまわりにいた人々も、弟子たちも、知りたがっていました。この疑問に対するイエス様の答えは明白です。13 節にある通り、「その日、その時は誰も知らない」これが、イエス様の答えです。

過去にも現在にも、このイエス様からの答えに納得がいかない人々はいます。それが「いつ」なのか、なんと  
してでも知りたい、そう思う人々が、これまで様々な「説」を唱えてきました。私が子供時代を過ごした宗教団  
体では、1914年の時点でこの世に生を受けていた人々がすべて死に絶える前に世の終わりが来て、神が  
直接支配する素晴らしい世界がはじまると信じられていました。だから、この世の終わりがもうすぐ来ることを、  
神を信じる人しか生き延びることができないことを、一分でも長く、一人でも多くに伝えなくてはいけない。そ  
ういって、信者たちは非常に熱心に伝道をしていました。多くの信者が、人生の時間をひたすら「伝道するこ  
と」にささげていました。しかし、その姿からは、愛することへの熱意を感じることはなく、宗教に対する覚めた  
思いだけが私の中に育っていきました。

けれども、教会に関わってからは、私の「宗教」に対する想いは変えられていきました。私はクリスチャンにな  
ってあるとき、「キリスト教の世界には、人を愛するということについて、本気で悩んだり、悔やんでいる人た  
ちがいる」ということに気が付きました。これはものすごい驚きでした。誰かを理解できない、とか、理解したい  
とか、支えてあげたいとか、支えてあげられなかったとか、赦したいとか、ゆるせないとか、御心がわからない  
とか、知りたいとか、そういうことで、教会の人たちはまじめに求めたり、悔やんだり、しているんです。神と人  
を「愛すること」にまつわる苦悩や喜びを、分かち合ったり祈り合ったり励まし合ったりしているんです。もちろ  
ん「キリスト教」を絶対視して自画自賛するつもりはありません。キリスト教も教会も欠けや過ちが沢山ありま  
す。それでも、人を愛すること、神を愛することを真剣に考えている人たちが確かにいたのです。そんな光景  
を、私は子供の頃にも、社会人になってからも見たことがなかったので、このことに気が付いたとき、目からう  
ろこが落ちるというより、目玉が飛び出そうなくらいの衝撃を受けました。そしてここには希望があると感  
じました。

「いつ、世の終わりが来て、いつ、天の国はやってくるのか」・・・ 私たちは誰も、その日その時を知りません。  
イエス様ご自身、それを知っているのは天の父だけだとおっしゃいました。それは一体いつなんだろうと、疲れ  
た目で天を仰いでつぶやきたくなる日は、誰にでもあるだろうと思います。しかし、主イエスは昔も今も変わ  
らず私たちと共におられ、私たちを「その日が来るまで」支えて導いてくださっています。なんのために、イエ  
ス・キリストはこの地上に人として来られたのでしょうか。なんのために、イエス・キリストは今も生きて私たち  
と共におられ、支え導いてくださるのでしょうか。それは、私たちが最も大切な掟である「神を愛し、自分のよ  
うに隣人を愛する」者として生きるためです。イエス様が「愛すること」をどこまでも求め、私たちにもそれを  
問われるのは、どんなに苦悩に満ちた世界であろうと、神のご性質でもある「愛」だけが、人に生きる勇気と  
希望を与えるからです。

花婿の到着を待ちくたびれた10人のおとめのうち、5人はともし火を絶やさないように予備の油を用意して  
おり、ほかの5人は用意していなかった。予備の油を用意していたおとめたちとは、愛することをあきらめな  
かった人たちだと言えます。なぜそう思うのかと言うと、「予備の油を用意していなかった5人のおとめ」は、  
少し前の24章49節に出てくる、出かけた主人の戻りは遅くなるだろうと思い、仲間を叩きはじめ、酒飲み  
どもと一緒に食べたり飲んだりしている「悪い僕」とが、話の内容からみて重なるからです。

24章の45～51節では、主人が不在の間も、任された仕事をしっかり果たした「忠実な僕」と、主人の戻り  
は遅いだろうと考えて、仲間にはひどい仕打ちをしたり、自分の欲求を満たしたり、うつぶん晴らしばかりして  
いる「悪い僕」が対比されて語られています。この話は、「キリストが再臨される時まで、あなたはどうか生きるか」  
と問いかける内容であり、同様の問いが、今日の箇所でも同様に投げかけられています。神を愛し、自分の  
ように隣人を愛すること。このことを何より大切なこととして生きるか、それとも、愛など空しい、無意味だ、き  
れいごとだと考えて、愛する生き方を放棄してしまうか。あなたはどうか、とイエス様は問いかけているの  
です。

もちろん、誰でも、愛することに困惑し、疲れ果ててしまう時はあるはずですが。花婿の到着を待つ間に、10人

のおとめは全員、寝てしまいました。疲れて寝てしまうことが誰にでもあるように、誰だって、愛することに疲れ果て、行き詰りを感じ、いつまでこんな日々が続くのか、もうたくさんだと途方に暮れて立ち止まってしまう時はあるはず。けれども、そこで愛なんて馬鹿馬鹿しいと言ってやめてしまうか、それとも、悩んでも傷ついてもなお愛することを求めて歩むか。人を生かす希望は、人としての存在がそれだけで報われるような喜びは、はたしてどちらの歩みの先にあるだろうか。…イエス様は、このたとえを通して、このことを私たちに考えさせようとしているのではないのでしょうか。

私たちは、愛する道を求めてゆくために召されています。しかし、主からのたくさんの愛をいただかなければ、私たちは神と人を、そして自分のことも愛し続けることはできません。愛することをやめないために、まずは私たちが主の愛を豊かに受け続けなくては、私たちは枯渇してしまいます。主イエス・キリストは十字架の上でもなお、私たちに愛を注いでくださる豊かなお方です。イエス様の愛に限界はありません。神の限界なき愛は、この地に人としてお生まれになったイエス様の生き方、そのお姿によって私たちに現され、証明されたのです。私たちの弱さをご存じでおられる主イエスは、私たちをお見捨てになりません。めんどうくさい、もうかまうのはやめたとって、私たちが捨てたりしません。

ですから私たちは、神と人と自分を愛するために、安心して大胆に主の愛に頼り、主からの愛を求めて注がれてまいりましょう。そしてこれからも、主と共に、また兄弟姉妹と共に、主に在って大いに愛することに悩んでまいりましょう。

「眠いときは寝ちゃうよね。できない時はできないよね。それでも、終わりのときまで愛することをやめないで。」これがイエス・キリストの到来を「待つ」私たちへの、主イエスの願いです。

---

祈り